

寄稿 インドネシア駐在記



大川原 賢勇（おおかわら けんゆう）
兼松トレーディングインドネシア会社

1. はじめに

昨年4月にインドネシア赴任を命ぜられ、7月に赴任し、そしてインドネシアでの生活が始まって1年以上が経過した。赴任する前は東京で鉄鋼製品の輸出業務をしており、インドネシアとも取引していたので全く知らない国ということもなく、また海外駐在で得られる経験は何物にも代え難い貴重なものになることを認識していたので、入社3年目で駐在員となることに対して、前向きな印象と漠然とした高揚感を感じていた。

しかしながら、そこは右も左も分からない異国の地であり、赴任後、当地での生活が始まると、生活面においても、業務面においてもさまざまなことに悩まされることとなった。

私が駐在生活で感じている日本とインドネシアとのギャップ、またその中で何を学び、何を感じているかという点をお伝えしたいと思う。

2. インドネシア概要

インドネシアは、日本から南西に5,700kmほど離れた島国であり、2006年の1人当たりGDPが1,663ドルほどの、発展途上国に分類される国である。島数は17,000ともいわれ、多種多様の民族が暮らす島々が一つとなった国家である。オランダによる植民地支配、第2次世界大戦時の日本の占領から1945年に独立し、現在は世界で一番イスラム教徒の多い国といわれている。

3. ジャカルタ生活から見えること

当地で生活して強く感じるのは、所得水準の格差とそこから派生する教育水準の格差、健康状態の格差等々、人口2億3,000万人の隅々にまで浸透している格差と、その格差を覆すことができない



少し郊外に出るとたくさんの自然と触れ合える



市内中心部では商業用の高層ビルと住宅が密集している



市民の足であるバジャイ
渋滞の一因にもなっている

社会システムがあるということだ。

ジャカルタ市内には、高層マンションに住んで高級外車を乗り回すような所得水準の高い人が少なくない一方で、市内中心部であっても、赤ん坊を抱えた女の子が物ごいをしていたり、1日数千ルピア（数十円）で生活している人も非常にたくさん存在する。

そういった状況のため、ジャカルタ中心街であっても治安が安定しているとは言えず、われわれ日本人が生活するようなマンションやオフィスでは厳重な警備がなされており、マシンガンを持ったガードマンを見ることが日常茶飯事となっている。

街中ではさまざまなデモがよく行われており、交通渋滞が頻繁に発生している。デモ隊によって私の乗っている車が囲まれてしまったことがあったが、集団化した人間の恐ろしさを感じた。

このようなことは、生活してみて初めて実感する点であり、日本では決してできない貴重な体験を重ねている。

4. 業務から得られるもの

業務上、さまざまな人と接する機会があり、それぞれの国の人の考え方、仕事のやり方等々についてさまざまな発見がある。インドネシアの人々との業務で感じるギャップにはここ1年間悩まされているが、それに対応するにつれてたくましくなっていると感じる。

インドネシア人の中でも、ジャワ島、スマトラ島、カリマンタン島等の出身地域の違い、また、華僑系、オランダ系等の移民の出身国の違い、イスラム教、キリスト教、ヒンズー教等の宗教の違いが見られるように、非常に多くの文化が入り混じっている。そういう背景があるためか、彼らから、日本の文化、歴史、慣習、また家族に関して質問されることが多く、そういったことを通して、あらためて自分自身のルーツ、アイデンティティーについて考えさせられている。多様な文化的背景を持っているインドネシアの人々と共通認識を持ち、一つのビジネスを進展させていくことは、非常に難しいことだが、まさにこの点でこそ、個人として、会社として、日本人としてのパワーが試されていることを実感でき、当地でのモチベーションにつながっている。

このように、相手の文化的背景を尊重し、日々の会話や打ち合わせ等を進めていく中で、インドネシア人との友好関係を築くうえで特に大切だと感じることは、日本では敬遠されるような相手のプライベートなことにも踏み込み、共感し、共に喜び、怒り、悲しむということだ。最初は戸惑いがあったが、このようにして友好を築く方法にこそ、多種多様な宗教、文化、民族の人々が暮らすインドネシアが一つの国として存在し得る秘訣があるのではないかと感じている。実際に、私自身の結婚のために日本へ一時帰国をした折には、取引先や職場のインドネシアの人々から、本当に心からのお祝いの言葉をいただいたし、彼らはわがことのように喜んでくれた。そのようなお祝いを素直に喜ぶとともに、彼らの純粋な気持ちとフレンドシップは、何処にいても大事なものであることをあらためて実感させられている。

赴任当初は、当地になじむためにインドネシア語を勉強しなければとか、インドネシア人の考え方を理解しなければとか、自分を強制的にインドネシアになじませようと考えていた。しかし、時間の感覚の違いに始まり、作成した資料の誤字脱字を気にしないどころか、間違いを指摘しても訂正しようとしめない、ということなど、当方が感じるギャップは大きく、数年で克服できるようなものではないと感じた。中でも、業務で接する政府の役人の対応や考え方は本当に理不尽なものが多く、理解に苦しむことが多々あった（ただ、役人の言動に対しては、インドネシア国民の中での評判もあまり良くなく、彼らの考え方は、国民のそれともずれているようだ）。

現在では、むしろこういうギャップがあるのは当たり前で、このようなギャップが存在するからこそ、本来大事にすべき当たり前のことを重視し、ありのままの自然体で生活や業務に取り組むことが大切だと実感している。私がインドネシア人になることは無理だし、時間感覚のようなものを変えることも難しい。逆に、自分の感覚を大事にする方が、相手も変に構えた姿勢ではなく、昔からの友人のように、自然に対応してくれることにつながるのだと考えるようになった。そういう簡単なようで難しい、自然体でいることができるようになったという点において大きく成長したし、今、振り返ると、そのような姿勢によってインドネシアの人々との友好を一層深めることができた、実りある1年間であったと感じている。

5. 最後に

上記で述べたように、日本国外に住んでいるからこそありのままの自然体でいるべきという、一見逆説的な事柄を学び取ることができたことが、現在までの駐在体験で一番の収穫である。今後もこの点を念頭に置き、日本とインドネシア双方の発展につながるようなビジネスに取り組んでいきたい。